

### 地図帳で子どもの世界を広げよう

地図・地理普及特別班

#### ■地図帳って、むずかしい？

地図・地理普及特別班（以下、普及班）が、昨年の冬に実施した「子どもたちの地図帳に関する意識調査」では、地図帳が好きな子どもは全体の52%、地図帳が嫌いな子どもは全体の11%を占めるという結果が出ました（詳しくは、この4月にお送りしました冊子「地図帳好き？ 嫌い？ この県知ってる？」をご覧ください）。

地図帳好きの子どもの数が、地図帳嫌いの子どもの数を大きく上回ったことは非常にうれしいことなのですが、1割強を占める地図帳嫌いの子どものことについても、目をそらさずに考えていかなければならないと感じています。

地図帳が嫌いな子どもたちの、嫌いな理由の大半は次のようなものです。

「いろいろと書いてあるのでむずかしそう」・「使い方がよくわからない」・「何が書いてあるのかわからない」… 41%

確かに地図帳は他のどの教科書よりもむずかしいかもしれませんが、また、使いこなすためには訓練も必要です。しかし、逆に、地図帳の見方や使い方がわかれば、地図帳をきらいでなくなる（好きになれる）可能性が少なからずあるのではないのでしょうか。

#### ■地図指導の位置づけ

学習指導要領でも、地図活用能力を基礎・基本の学力と位置づけ、十分な地図の指導をするように謳っています。学習の基礎・基本として、「読み・書き・そろばん」という言葉がありますが、この「読む」対象の中には文字や文章だけではなく、「地図を読む」能力を含めてもいいのではないのでしょうか。

地図帳指導に関しては、そのための独立した単元や、社会科教科書内での扱いはありません。しかし、計画的に指導の時間

を設定して、子どもたちの地図活用能力を高めてあげることが必要不可欠であることは、言うまでもないでしょう。

#### ■ルールの指導

子どもたちの地図活用能力を高めるために一番大事なことは、基礎・基本となる地図帳の使い方、ルール（約束事）を子どもたちにわかりやすく伝えてあげることです。

以下の三つの技能を子どもたちが身につけることができ、自力で地図を使えるようになれば、地図の力はしだいに広がっていくでしょう。

- ①さくいんを活用する
- ②地図記号を意識する
- ③地図の色（凡例）を意識する

では、①のさくいんの指導について、具体的な指導案を提示してみたいと思います。

まず、自分の住んでいる町や、ニュース等で子どもたちが知っていると思われる町を、地図上から探す作業をしてみます。さくいんの使い方を知らない子どもたちは、自分の住んでいる町でさえも探すのに時間がかかるでしょう。知らない町ならなおさらです。自力で探せない子どもも出てくるでしょうから、机間巡視でしっかりフォローすることも重要です。そこで、「もっと早く、自分で探せる裏技を知りたい？」と尋ねると、多くの子どもは「知りたい!!」とのってくるでしょう。



しかし、そこですぐにさくいんの説明にはいるのではなく、「地図の番地」を確認する作業を入れます。

T：「みんなの家には住所・番地があるよね？ 実は、地図帳にも番地があるんだよ」

C：「えーっ、ホントに？」

T：「本当ですよ。まずその秘密を教えてください。まっすぐな青い線が、地図に何本も引いてあるのがわかる？」

C：「あっ、本当だ!!」 「えー、どこ？ どこ？」  
「ここだよ」 「へえーっ!!」

T：「じゃあ、このページに青い線が何本あるかなあ？」

このように子どもたちに地図帳に引かれている「青い線」（緯線・経線）を認識させる作業をします。ほとんどの子どもは、地図上の青い線に気づいていないでしょう。ボールペンなどで青い線をなぞらせるのも、効果的でしょう。

この作業を通して子どもたちは、縦横に引かれた青い線で形作られた長方形のマスが地図上にたくさんあることに気づくことができます。

次に、ページの上下と左右にある青と赤の水玉マークに着目させます。水玉の中に書いてあるカタカナと数字を組み合わせ「番地」を作ることができることを説明します。

T：「これ算数の時間に習った何かと似ていない？」

C：「九九みたいだ!!」

このようなやりとりも、番地の説明をわかりやすくする方法でしょう。

さらに、最初に探した町の番地を地図上で確認し、それからようやく「さくいん」の指導に入っていきます。地図上で調べた番地と、さくいんで探した番地が「同じ」ことを確認できると、子どもたちも「番地」と「さくいん」の関係に納得することでしょう。

少しまわりくどいかもしれませんが、このステップを踏むことで興味・関心を維持しながら番地とさくいんの意味を、より具体的に理解させることができるのではないのでしょうか。

ここまで理解できれば、あとはいくつかの町をさくいんを活

用して探す練習を繰り返すだけです。その際、なるべく子どもたちになじみのある地名を探すようにすると、子どもたちもより興味をもちながら作業に取り組むことができるでしょう。繰り返すことで子どもたちはさくいん活用のスキルを着実にものにしていき、そのスピードも、どんどん速くなっていくことでしょう。

### ■独自のルールを創ろう

他にも地図の技能はいくつもあります。前に提示した三つのポイントをおさえるだけでも、地図の世界はグッと広がることでしょう。これらの地図の使い方、ルールをおさえられたら、次にクラスでのルールを創るのも、地図活用能力を高めるいい方法です。それはたとえばこのようなものです。

「授業で出てきた地名は地図帳で必ず確認する」

「新聞等で見た地名を1日に一つ以上探す」

「旅行やドライブに行く場合には地図帳を持っていく」

地図活用のルールを知ることとたいせつなことですが、よりたいせつなことは地図を使うことです。子どもたちに少しでも地図帳を活用する機会を設定し、地図に対する意識をもたせることは非常に重要なことです。地図を使うクセがついてしまえば、あとは自ずとその技能はレベルアップしていき、子どもたち自身が新たな活用法を見出していくことも期待できます。

### ■拡がれ、地図から日本・世界へ

中・高学年の時期は、外界・世界により興味が拡がっていく時期でもあります。地図を見ているといろいろな発見があるはず。「多古町だって。イカ町もあるのかな？探してみよう」、「旅行でいく〇〇町はいちごがたくさんとれるんだね、楽しみだね」、「携帯電話ってこの町で作っているんだ」などなど…。

地図帳は子どもたちの好奇心や興味を外界に拡げるための格好のツールです。しかし、それも子どもたちが活用できなければ宝のモチ腐れになってしまいます。一人でも多くの子どもたちに地図の活用法を身につけてもらい、地図を見る楽しみ、地図からの発見の喜びを知ってもらいたいとねがっています。